

幼児及び小学校低学年の児童のための ソルフェージュ指導法の研究 —— 8分音符の音価に着目して ——

嶋田英里

1 序論

1-1 はじめに

ソルフェージュ学習の目的は、楽譜を素早く正確に読み取り、それらを正確に再現する力を養うことにある。ソルフェージュ学習は、早い時期に開始することが望ましい¹⁾。一方、楽譜に用いられる抽象的な記号を認識し、それらのルールを理解したうえで楽譜の指示内容を再現する能力が未だ十分に備わっていない幼児や小学校低学年の児童（以下、「幼少期学習者」という）にとっては、基礎的で簡単な練習課題であるにもかかわらず、課題の趣旨や関連するルールが咀嚼できず、学習の進捗が長期間停滞してしまうケースが見られる。このような状況は、幼少期学習者の学習意欲を低下させ、音楽に対する苦手意識すら植え付けかねない。幼少期学習者のソルフェージュ学習を円滑に進めることは、その後の高度で複雑な学習内容に対応する能力を育む上でも重要である。本研究レポートは、幼少期学習者のソルフェージュ学習を円滑に進めることの助けとなる、リズム学習を骨子とした指導法について考察する。

1-2 本研究の背景と目的

リズム学習において、幼少期学習者に、音符とその音価²⁾に関する相対的な関係を拍節及び拍³⁾と結び付けて理解させることは、大変重要である。リズム学習は、4分音符を1拍の単位とする、すなわち4分音符を単位音符とする拍子から開始するのが一般的であるが、その学習過程で8分音符をリズムパターンに導入した途端に、リズム学習の進捗がしばしば停滞する傾向が一部の幼少期

・本研究レポートは、武蔵野音楽大学附属音楽教室講師研究会（2019年7月 東京）での口頭発表原稿を基に、加筆・再構成したものである。

1) 「音楽を楽しむには、趣味でも専門でも、早くからドレミを覚えたり、譜読みを習うソルフェージュの勉強を始めた方がよい」(呉 1987: 12)。

2) 「音符や休符によって表される音の長さ」。(佐々木 1996: 111)。

3) 本研究レポートでは、拍節、拍及び拍子の定義について、次頁注に載せる 1996『ニューグローヴ世界音楽大事典』及び 1982『音楽大事典』平凡社の各項目を参考に意味分けしている。

学習者に見られる。

その具体的な事例を以下に示す。

① 2個の8分音符を連符でつないだもの〔譜例1〕を、2個の4分音符〔譜例2〕の音価として表現してしまう。

〔譜例1〕 2個の8分音符を連符でつないだもの

〔譜例2〕 2個の4分音符



この状況がよく見られるのは、4分音符の後に2個の8分音符を連符でつないだものが続くリズムパターン〔譜例3〕が指示された場合である。このとき幼少期学習者は、4分音符を打った直後に、4分音符の2分の1の音価の8分音符をそれぞれ等しい長さで2回打つという楽譜上の指示内容を正確に再現できず、3個の4分音符〔譜例4〕として表現してしまう。

〔譜例3〕 4分音符の後に2個の8分音符を連符でつないだものが続くリズムパターン

〔譜例4〕 3個の4分音符



具体的には、8分音符学習中の幼少期学習者に〔譜例3〕のリズムパターンを含む旋律の例〔譜例5〕を視唱させると、2個の8分音符を連符でつないだものを、2個の4分音符の音価で歌ってしまう。

-
- ・拍節とは、「楽曲またはその一部における音符の時間的組織化を指し、複数の拍から成る規則的な時間間隔が感じられ、各音符の長さが拍の数によって計量されるようなものをいう。さらに、一定の拍数がまとまって小節というより大きな単位を構成する。拍節は、リズムの知覚や記譜を可能にする手段である。(拍節と拍子はほぼ同義であるが、拍節という語は比較的抽象的な意味で時間の規則的組織化を指し、拍子という語は、4分の3拍子、2分の3拍子など、拍節の具体的な型を指すことが多い)。(角倉 1996: 565)。
 - ・拍節とは、「一定の時間単位で繰り返されるアクセントの反復を指す。また、このアクセント同期に従って縦線で仕切られた部分を小節といい、この際の基本的な時間価値を拍という。(西原 1982: 1844)。
 - ・拍とは、「計量音楽の基礎を成す基本的な律動のことで、楽曲の時間の単位となるもの。(加田 1996: 561)。
 - ・「拍 (beat [英]) は拍子の単位。音楽の時間的進行に関する単位。一定の拍が集まって時間の単位をなし、その音楽のリズムの骨格をなすものを拍子、そして、その際に小節を単位とする一定の同期のアクセント反復を拍節という。(無署名 1982: 1844)。
 - ・拍子とは、「一定数の拍が集まって音楽の時間単位となり、リズムの骨格となすとき、これを「拍子」という。強拍と弱拍が規則的に繰り返されるアクセントの周期進行のこと、あるいは小節とそれを形づくる拍の数(および拍子内部の単位となる1拍の音価)との関係を表したものと定義することもある。(角倉 1982: 2014)。

〔譜例5〕〔譜例3〕のリズムパターンを含む旋律の例



②付点4分音符と8分音符を組み合わせたリズムパターン（以下、「付点のリズム」という）〔譜例6〕を正確に表現できない。

〔譜例6〕付点のリズム



幼少期学習者が、付点4分音符の音価を正確に理解できないうえ、それに続く8分音符がどのタイミングで打たれるのかが判断できず、リズム表現が不正確になってしまう。

音符の音価についての理解がこのように曖昧になることは、単にリズム表現の不正確さに留まらず、幼少期学習者がその後の音楽学習を円滑に進めていくことの妨げになり得ると懸念される。

このようなつまづきを経験する幼少期学習者は、執筆者の経験に基づく実感によると、例年、指導対象となる幼少期学習者全体のうちの3～4割程度存在する。その存在規模に鑑みれば、学習効果を実感させることができる指導法を考察することは、幼少期学習者の音楽に対する学習意欲をより高める学習環境を整備し、ひいては音楽教育の現場を活性化していく上で有意義であると考えられる。本研究では、以上のような背景を踏まえ、8分音符の導入を円滑に進めることの助けとなる、リズム学習を骨子とした指導法について考察する。

1-3 幼少期学習者に向けたソルフェージュ指導法についての先行研究

幼少期学習者に向けたソルフェージュ指導法については、さまざまな研究及び実践がなされている。ここでは、その中でも特に多くの示唆を本研究に与えたものを紹介する。

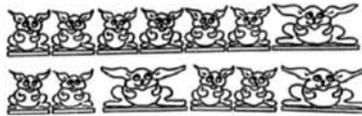
(ア) 先行研究 1

楽譜上の抽象的な記号及びルールを理解することが難しい幼少期学習者に対して、まずは、音符を用いずに、幼少期学習者にとってより親しみやすいウサギのイラスト及び四角形を用いて、ソルフェージュ学習を開始させるという指導法が報告された研究（以下、「先行研究1」という）⁴⁾がある。

4) 武田1993。

る。先行研究1は、アメリカの音楽教育学研究家であるユニス・ボードマン Eunice L. Boardman とバーバラ・アンドレス Barbara Andress による国際幼児教育セミナー（1992年7月 東京）の特別講演会での配布資料に掲載された「図像的模式」を紹介している。この「図像的模式」〔図1〕、〔図2〕及び〔図3〕⁵⁾は、童謡《メリーさんの羊》の冒頭フレーズを、楽譜に用いられる音符ではなくウサギのイラスト〔図1〕、〔図2〕及び四角形〔図3〕に置き換えるとともに、音符の音価の違いをウサギのイラスト及び四角形の横幅の長さで表している。

「図像的模式」は、学習段階的に次のように移行していく。まずは、ウサギのイラストの横幅の長さの違いによって音価のみが示されるものから〔図1〕、ウサギのイラストの位置を上下にずらすことにより音の高低をも示すもの〔図2〕に移行する。その後、ウサギのイラストは四角形に変えられた図像となり〔図3〕、実際の楽譜に近づけていく方法を採用している。



〔図1〕 ユニス・ボードマン、バーバラ・アンドレスによる「図3 歌とリズムの関係」(武田 1993: 263)。



〔図2〕 ユニス・ボードマン、バーバラ・アンドレスによる「図4 歌と高低の関係」(武田 1993: 264)。



〔図3〕 ユニス・ボードマン、バーバラ・アンドレスによる「図5 歌と楽譜（導入）の関係」(武田 1993: 264)。

このような図像による学習は、幼少期学習者の興味を惹きつけ易い。他方で、このような図像を幼少期学習者が目にしたとき、ウサギのイラストの顔の中央部分に注目してしまい、彼らの認識は、横幅の長さの違うウサギが書かれているという程度に留まるのではないかと推察される。つまり、ウサギの横幅が音符の音価を表していて、例えば、2分音符を表すウサギは、他のウサギの2倍の横幅であるから、他のウサギの場合の2倍の長さで表現するというような図像の意図を、幼少期学習者が正確に理解するのは困難ではないと思われる。

この指導法をより効果的に使用するためには、音の鳴り始めの位置を図像上に示すことが考えら

5) 〔図1〕、〔図2〕及び〔図3〕は、武田 1993 に紹介されている、ユニス・ボードマン、バーバラ・アンドレスによる国際幼児教育セミナー（1992年7月 東京）の特別講演会での配布資料に掲載された図を引用したものである。本研究の〔図1〕は、同資料の〔図3 歌とリズムの関係〕、〔図2〕は、〔図4 歌と高低の関係〕、〔図3〕は、〔図5 歌と楽譜（導入）の関係〕を、それぞれ引用したものである。

れる。前述のとおり、幼少期学習者の視線はおそらくウサギの顔の中央部分に注がれるため、幼少期学習者は、図像の中央が音の鳴り始めのタイミングだと捉えるものと考えられる。しかし、そのように誤認されてしまうと、「図像的モード」の学習効果は半減してしまう。そこで、例えば、ハイタッチをしている右手で音が鳴っているウサギの図像【図4】を採用し、図像の左端のタイミングで音を鳴らすとともに、その音がウサギの横幅の長さのぶん継続することを印象付けるなどの工夫によって、音の鳴り始めのタイミングを明確に示唆する目印を図像上に加えることで、学習効果がさらに向上すると考えられる。



【図4】ハイタッチをしている右手で音が鳴っているウサギの図像

なお、《メリーさんの羊》の冒頭のリズムは、本来は付点のリズムであるが、「図像的モード」では、ウサギ及び四角形の横幅の長さによると、4分音符のリズムに変更されていることが推察される。その変更が施されたのは、付点のリズムをウサギのイラストの横幅の長さによって厳密に表現することや、幼少期学習者にウサギの図像以外の要素を用いずに、付点4分音符と8分音符の音価自体を正確に理解させることが、非常に難しいからだったのだろうと考えられる。この図像的モードを用いた指導法は、楽譜上にある記号やルールを学習する前段階において、それらの概念を簡潔に理解させる導入方法として非常に効果的であると考えられるものの、より進んだ学習事項についての対応の点で課題が残る。

(イ) 先行研究 2

日本における幼少期学習者への音楽教育には、欧州の作曲家によって考案された音楽指導法や教育理念に基づいた指導法が広く普及している。中でも、ゾルターン・コダーイ Zoltán Kodály (1882-1967) のコダーイシステム⁶⁾の理論をソルフエージュ学習に取り入れる指導法が報告されている(以下、「先行研究 2」という)⁷⁾。

先行研究 2 は、コダーイの音楽教育理念の特徴の 1 つである、自国の民謡やわらべうたを音楽教育の導入に用いるという指導法に倣い、日本のわらべうたから幼少期学習者に学ばせるべき音楽的

6) コダーイ・メソッド Kodály method とも呼ばれる。「ゾルターン・コダーイによって考案された子供のための音楽教育法。『移動ド movable doh』唱法を用いてソルフエージュの基礎を徹底的に訓練することによって、初見視唱、聴音、読譜、作曲に重点を置いた視聴能力開発を目標とする。ハンガリーの民俗音楽を基にして、作られた歌曲や練習曲が進度に合わせて用いられる」。(無署名 1996: 503)。

7) 尾形、山内、原田、志村 2002。

要素を抽出して幼少期学習者に実践させる指導法について報告している。学習にはリズムカードを使用して、わらべうたに用いられているリズムパターンを学習させる。これらのリズムパターンでは、幼少期学習者にとって馴染み易い基礎的な音符及び休符による簡素な構造が採用されている。基礎的な音符及び休符を用いてこのように簡素なリズムパターンを採用し、リズムカードに掲載して幼少期学習者に繰り返し学習させるリズム指導法は、ソルフェージュ指導の場のみならずピアノ指導にも広く普及している。本研究の幼少期学習者に対するリズム基礎学習指導法の考察は、先行研究2から多大な示唆を得てなされたものである。

(ア) 及び (イ) にて示したとおり、本研究の主題に関連する先行研究には、音符の音価を認識させる指導法（先行研究1）や、リズムカードを使用して簡素なリズムパターンを学習させる指導法（先行研究2）などの例が見られる。他方で、幼少期学習者にとって特に習得が難しい8分音符の音価を認識させることに着目した指導法を研究した事例は発見できなかった⁸⁾。

(参考) オルフの教育理念に基づく指導法の実践⁹⁾

以下で紹介するのは指導法の研究事例ではないが、日本における幼少期学習者への音楽教育として、カール・オルフ Carl Orff (1895-1982) の教育理念に基づく指導法を実践している例も注目に値する。この指導法の下では、オルフの理念に基づき、身体の動きや、学習者の母国語（ここでは日本語）によることば、うた（民謡やわらべうた）、器楽によるアンサンブルなどを通して、幼少期学習者の内面にある創造性を育むことを念頭に、模倣や問答を通して幼少期学習者への音楽指導が行われている。音楽の専門家を目指す子どもたちのみならず、子どもたち全般を対象に音楽教育を実施することで、彼らの自発性と豊かな表現力を育むこの指導法には、高い学習効果が期待される。

なお、オルフの理念に基づくこの指導法の一つの特長は、子どもが使う平易な単語がリズムの素材として用いられ、「ことば本来が有しているアクセントやイントネーションを抽出し、それをリズム化」¹⁰⁾ したものを、子どもたちに模倣させることによって実践させる点である。他方で、楽譜による表現の確認は経験させないため、ソルフェージュ的なアプローチが補完的に必要となる。

2 本論

2-1 本研究の背景と仮説

本研究レポートは、幼少期学習者のソルフェージュ学習への対応能力を円滑に育み、その次に続くより高度且つ複雑な段階にスムーズに移行させるための、リズム学習を骨子とした指導法について

8) 2019年10月現在。Cinii 学術情報データベースによる。

9) 細田 1990: 163-168、宮崎 2013 を参考にまとめた。

10) 宮崎 2013: 40。

て考察を進める。

リズム学習において、幼少期学習者に、音符の音価に関する相対的な関係を拍節及び拍と結び付けて理解させることは、大変重要である。リズム学習は4分音符を単位音符とする拍子から開始するのが一般的であるが、その学習過程で8分音符をリズムパターンに導入した途端に、音符の音価についての理解が曖昧になり、リズム学習の進捗がしばしば停滞する傾向が一部の幼少期学習者に見られる。

音符の音価についての理解がこのように曖昧になることは、リズム表現の不正確さにもつながり、幼少期学習者がその後の音楽学習を円滑に進めていくことの妨げになり得ると懸念される。

このような状況が生じる理由は何かについて、本研究では次のような仮説を立てた。

4分音符を単位音符とする拍子においては、8分音符をリズムパターンに導入した場合、8分音符の音価が4分音符の音価の2分の1であることに起因して、リズムパターン中の少なくとも1つの音符が整数番目の拍で打たれない事象が発生する。〔譜例7〕にその例を示す。このような事象に接したことにより、幼少期学習者による音符の音価に関する理解が曖昧になるのではないだろうか。

〔譜例7〕 少なくとも1つの音符が整数番目の拍で打たれない事象が発生するリズムパターンの例



2-2 本研究の概要

2-2-1 単体の8分音符の前後に4分音符を配置するリズムパターンの採用

この仮説に基づき、本研究では、8分音符の音価を正確に認識できるよう促すリズムパターンを幼少期学習者に実践させ、その効果確認を行うことを骨子とする幼少期学習者のための指導法を考案した。本指導法には、単体の8分音符の前後に4分音符を配置するリズムパターン（以下、「採用リズムパターン」という）〔譜例8〕を採用し、幼少期学習者のリズム学習を円滑に進めるための触媒的な役割を持たせて使用する。

〔譜例8〕 単体の8分音符の前後に4分音符を配置するリズムパターン



現在、楽譜上で「普通に用いられる範囲の」音符及び休符の相対的な音価の関係、すなわち音符及び休符の長さの時間的比率は、「長さの順に並べた場合、いずれもすぐ上位の時価の半分、すぐ

下位の時価の2倍という関係にある」¹¹⁾。それ故に、8分音符の学習導入時にまず2個の8分音符を連桁でつないだものを用いるのは自然であり、理に適っている。

他方で、幼少期学習者は、その学習段階において通常は2個の8分音符を1つのユニットとして学習するため、2個目の8分音符が整数番目の拍で打たれていないという事実が意識されにくい。そのことが、8分音符の音価を正確に理解することを妨げる1つの要因ではないかと考えられる。

幼少期学習者にとって、数えられる、つまり、整数番目の拍が馴染み易いのは言うまでもない。2分の1という概念を未だ十分に理解していない幼少期学習者にとって、数えられない、つまり、整数番目の拍に当たらない拍は認識しづらいため、2個目の8分音符の音価への理解及び認識が曖昧になる。そのことにより、整数番目で打たれる1個目の8分音符の音価に対する理解もそれに引きずられ、遑って曖昧になってしまうものと考えられる。

8分音符は、2個を連桁でつないだものが先に学習され、それに遅れて、2個を切り離れた単体の8分音符が、しかも、多くの場合は、4分音符の2分の1である8分音符の音価に関する学習が十分に行われないうま、付点4分音符や8分休符などの、幼少期学習者にとって難解な音価の音符又は休符との組み合わせで学習される。2個の8分音符を連桁でつないだものを8分音符学習の導入段階で学習させることは、音符の音価についての相対的な関係を学習させるうえでももちろん重要である。他方で、8分音符の音価に関する学習が十分に行われないうことにより、上述したようなつまずきが生じていることも事実である。

この点に鑑み、2個の8分音符を連桁でつないだものを学習させるのと同時に、8分音符単体【**譜例9**】を学習させることを意図したものが、採用リズムパターン【**譜例8**】である。

【**譜例9**】 8分音符単体



8分音符単体を学習させるに当たり、8分音符を単位音符とする拍子を使用すれば、8分音符が整数番目の拍で打たれるリズムパターンを構成することはできる。しかし、最も簡素な8分音符のみによるリズム【**譜例10**】を用いたとしても、音符の相対的な音価の長さの関係を学習させることはできない。

【**譜例10**】 8分音符のみによるリズム



11) 無署名 1982: 487。

これに対し、採用リズムパターンは、1個の8分音符の前後に、その2倍の音価である4分音符を置くという簡素な構造を備える。この構造を採用することで、このリズムパターンは、8分音符を単位音符として、拍の整数番目に打たれるリズムパターンを実現している。これにより、8分音符単体の学習過程において、一般的に組み合わせで学習される付点4分音符や8分休符などの、幼少期学習者にとってさらに高度な学習対象に取り組む前に、既に学習を済ませた4分音符との組み合わせによるリズムパターンによって8分音符単体の音価を学習することができることが、採用リズムパターンの特長である。

このリズムパターンは、以下の3つの効果を通じて、幼少期学習者が8分音符の音価を正確に認識できるよう促すと考えられる。

第一の効果は、8分音符の直前に4分音符を置くことで、8分音符が4分音符の音価の理解を妨げないようにし、且つ、幼少期学習者が4分音符の音価をまず確認するのを容易にすることである。8分音符の直前に置かれた4分音符は、8分音符の直後に置かれる4分音符の正確な表現を促す役割をも果たす。

第二の効果は、8分音符を単独で配置し、直後に再び4分音符を置くことで、幼少期学習者が8分音符単体の音価を正確に認識できるよう促すことである。リズム学習において、複数の音符及び休符を用いたリズムパターンを幼少期学習者に実践させた場合、最後に置かれる音符及び休符の音価に関する認識及び表現が曖昧になりやすい。採用リズムパターンの、8分音符の直後に置かれた4分音符は、幼少期学習者にとって既に学習済みの音符であることから、音価を正確に認識し表現しやすく、本リズムパターンの最後に置かれる音符として最も適していると考えられる。

第三の効果は、8分音符が整数番目の拍で打たれる構造によって、8分音符とその音価の相対的な関係に馴染み易くなることである。

2-2-2 本指導法の具体的内容

本研究では、既に確立され広く普及している、基礎的な音符及び休符を用いたリズムパターンによるリズム基礎学習法をベースにしつつ、それに対して、幼少期学習者が8分音符の音価を認識できるよう促すための新たな工夫を施した指導法を考案した。

具体的には、本研究においては、4分の2拍子1小節分を1ユニットとする基礎学習のためのリズムパターン（以下、「基礎学習のためのリズムパターン」と略する）と採用リズムパターンをセットにした指導法を考案した。

採用リズムパターンには8分音符単体の音価を正確に認識できるよう促すための役割、すなわち、学習効果を最大限に引き出す触媒としての機能のみを持たせ、基礎学習のためのリズムパターンによるリズム学習に組み込む。基礎学習のためのリズムパターンは、基礎的な音符及び休符を用いたものとし、さらに次の2点を考慮して、4分の2拍子1小節分をリズムパターンにおける1ユニットとする。

- ・リズム学習は4分音符を単位音符とする拍子から開始することが一般的であって、2拍子は「最も基本的な拍節法」¹²⁾である点。
- ・拍数が2拍であることにより、幼少期学習者にとって負担なく実践できる、簡素で且つ学習項目を凝縮したリズムパターンを構成できる点。

以上を踏まえ、基礎学習のためのリズムパターンに使用するリズムパターンは、以下の各要素で構成する〔譜例 11〕。

〔譜例 11〕 基礎学習のためのリズムパターン

- リズムパターン 1. 2個の4分音符によるリズムパターン
 リズムパターン 2. 2個の4分音符をタイで結ぶ形で2分音符を表記したリズムパターン
 リズムパターン 3. 2分音符
 リズムパターン 4. 4分音符と4分休符によるリズムパターン
 リズムパターン 5. 4分休符と4分音符によるリズムパターン
 リズムパターン 6. 2個の8分音符を連桁でつないだものを2回繰り返すリズムパターン
 リズムパターン 7. 1個の4分音符と2個の8分音符を連桁でつないだものによるリズムパターン
 リズムパターン 8. 2個の8分音符を連桁でつないだものと1個の4分音符によるリズムパターン
 リズムパターン 9. 1個の4分音符と2個の8分音符を連桁でつないだものについて4分音符とその直後の8分音符をタイで結ぶ形で付点のリズムを表記したリズムパターン
 リズムパターン 10. 付点のリズム

リズムパターン 1. から 5. は、音符及び休符が整数番目の拍に置かれるリズムパターンである。
 リズムパターン 6. から 10. は、少なくとも1つの音符が整数番目の拍で打たれないリズムパターンである。

12) 角倉 1982: 2016。

各リズムパターンは、学習の進捗に合わせて順序を入れ替えたり、省略したりして実践する。

なお、リズムパターン 2. とリズムパターン 3. とは、また、リズムパターン 9. とリズムパターン 10. とは、互いに表記方法は異なるが、同じリズムを表している。前者の表記においては、実際の音の数と表記される音符の数が一致しない形式で記載されている点で幼少期学習者にとって難易度が高いものの、2分音符に対して既に学習済みの4分音符に、又は、付点4分音符に対して既に学習済みの4分音符及び8分音符に、それぞれタイを施すことで、リズムパターン中の2分音符又は付点4分音符の音価の実際の長さが視覚的に分かり易く表現されている。これに対し、後者の表記では、実際の音の数と表記される音符の数が一致する形式で記載されている点で分かり易いが、2分音符又は付点4分音符のそれぞれについて定義されている音価の実際の長さをそれらの音符記号のみによって識別する必要がある点で、幼少期学習者にとって難易度が高い。

本指導法では、このように、実際は同一のリズムを表す両者を敢えて個別のリズムパターンとして区別して採用し、それぞれをリズムカードで幼少期学習者に示すようにすることで、幼少期学習者に対し、上述のような同一のリズムについての異なる表現方法の違いに馴染ませる機会も設ける。

2-2-3 本指導法による具体的指導方法

基礎学習のためのリズムパターンと採用リズムパターンをセットにした本指導法の具体的な指導方法を、以下に示す。

まず、本指導法は、以下の (A) から (D) に記載された内容に則ることを前提として実施する。

- (A) 本リズム学習に先立って、拍節及び拍、拍子に関する基礎的な知識と、本指導法で用いる音符及び休符の名称や音価を、幼少期学習者に予め教授しておく。
- (B) 基礎学習のためのリズムパターン及び採用リズムパターンが掲載された計 11 枚からなるリズムカード、2 個の 8 分音符を連桁でつないだものが表示されたカード、基礎学習のためのリズムパターンの拍子が表示されたカード【譜例 12】を準備する。本指導法は、幼少期学習者にこれらのカードを 1 枚ずつ示しながらリズム学習を実施させる。

【譜例 12】基礎学習のためのリズムパターンの拍子が表示されたカード



- (C) 本指導法の開始時には、基礎学習のためのリズムパターンの拍子が表示されたカード【譜例 12】を幼少期学習者に示す。指導者は、基礎学習のためのリズムパターンを構成する各リズムパターンを幼少期学習者に表現させる際には、その冒頭で〈1、2、1、2〉と拍を発声して教え、拍子、拍及びテンポを幼少期学習者に確認させる。各リズムパターンを同一のテンポで表現

とで一定の効果が得られることを確認することができた。

(1)2個の8分音符を連桁でつないだものを、2個の4分音符の音価として表現してしまう状況が改善されず、8分音符学習の停滞を経験していた幼少期学習者を、指導例（イ）に基づいて指導したところ、2個の8分音符を連桁でつないだものを含んだリズムパターンや、〔譜例5〕に示したような旋律を正しく表現できるようになった。

(2)付点のリズム学習に移行する段階に当たる幼少期学習者を、指導例（ロ）に基づいて指導したところ、期せずして付点のリズムの学習が円滑に進んだ。これは、8分音符の音価に関する理解が向上し、付点4分音符の音価の理解をも促した結果であると考えられる。

2-2-5 本指導法の課題

本研究では、8分音符の音価を正確に認識できるよう促す採用リズムパターンを4分の2拍子1小節分を1ユニットとする基礎学習のためのリズムパターンとセットにした指導法を考案した。

基礎学習のためのリズムパターンには4分の2拍子を採用した。このことによる4分の3拍子によるリズム学習への効果や影響については、検証途上である。

また、幼少期学習者が成長し、高度且つ複雑な段階に学習が及んだ際の、採用リズムパターンを実施したことによる効果や影響についても、今後の指導の実践を通して検証を続けていく必要がある。特に、シンコペーションや8分の6拍子のリズム学習への効果や影響等について注視していくことが重要であると考えられる。

3 結び

本研究レポートでは、幼少期学習者のソルフェージュ学習を円滑に進める助けとなる、リズム学習を骨子とした指導法について考察した。リズム学習において、一部の幼少期学習者の8分音符の音価についての理解が曖昧になり、リズム学習の進捗がしばしば停滞する傾向が見られることに着目した。これに対し、本研究では、8分音符の音価を幼少期学習者が正確に認識できるよう促す、単体の8分音符の前後に4分音符を配置する採用リズムパターンを採用し、4分の2拍子1小節分を1ユニットとする基礎学習のためのリズムパターンとセットにした指導法を考案した。本指導法の狙いは、採用リズムパターンに既に確立され広く普及しているリズム基礎学習法の大枠をほとんど変形させることなく、学習効果を最大限に引き出す触媒としての機能のみを持たせることであった。本指導法を幼少期学習者に実践させた結果、未だ検証途上ではあるものの、8分音符の音価に関する理解が高まり、リズム学習が円滑に進むようになるなど、現時点で一定の効果を確認することができた。一方、本指導法が幼少期学習者に及ぼす効果や影響等については、引き続き指導を通

して検証していく必要があることも明らかとなった。

幼少期学習者の多くは、8分音符が導入された直後では、その音価に関して十分に理解できていなかった場合であっても、その後リズム学習を続けた結果として、知識や経験が蓄積し、8分音符の音価について遡って理解し直した状態に到達する。他方で、一部の幼少期学習者のリズム学習の進捗が8分音符の登場によって停滞しがちになることも事実である。このような事情を踏まえると、より多くの幼少期学習者に8分音符の音価に関する学習効果を実感させることができる指導法を探求することは、非常に重要である。この課題に取り組むことで、早い段階でつまずきの要因となり得る石を取り除き、その後の学習が円滑に進むよう促すことで、幼少期学習者の音楽に対する学習意欲をより高めることができるのではないかと考える。そして、その取り組みが、ひいては、音楽に興味を持つ潜在性を秘めたより多くの子どもたちを音楽教育の場に迎え入れ、彼らの学習意欲を萎ませることなくむしろ大きく膨らませていくような環境の整備につながっていくのではないかと期待される。

本研究でこれまで得られた知見がこれらの側面に多少なりとも寄与するものとなるよう、それらを今後の指導においていかしつつ、研究を継続して、さらなる知見を蓄積していきたい。

■引用文献■

論文・研究レポート

- ・尾形久美、山内紀子、原田由美子、志村明美 2002「桐朋学園音楽教室のソルフェージュ指導統一のある一貫教育（特集 幼児期から10歳までのピアノソルフェージュ指導法大研究）」『ムジカノーヴァ 33』3月号：30-35、東京：音楽之友社。
- ・武田道子 1993「子どものソルフェージュ教育—その方法論をめぐって」『静岡大学教育学部研究報告（教科教育学篇）』第24号：257-268。

書籍

- ・呉暁 1987『ソルフェージュからピアノへ—4・5歳児の指導—』東京：音楽之友社。
- ・宮崎幸次 2013『新装版 カール・オルフの音楽教育—楽しみはアンサンブルから—』東京：スタイルノート。

事典

- ・加田萬里子（訳）1996「拍」『ニューグローヴ世界音楽大事典』第12巻：561。
- ・角倉一郎 1982「拍子」『音楽大事典』第4巻：2014、2016、東京：平凡社。
- ・角倉一郎（訳）1996「拍節」『ニューグローヴ世界音楽大事典』第12巻：565。
- ・Morehen, John. 1996「音価」佐々木勉（訳）『ニューグローヴ世界音楽大事典』第4巻：111。
- ・西原稔 1982「拍節」『音楽大事典』第4巻：1844、東京：平凡社。
- ・無署名 1982「拍」『音楽大事典』第4巻：1844、東京：平凡社。

- ・無署名 1982「音符」『音楽大事典』第1巻：487、東京：平凡社。
- ・無署名 1996「コダーイシステム」『ニューグローヴ世界音楽大事典』第6巻：503。

■参考文献■

論文・研究レポート

- ・細田淳子 1990「幼児のピアノ教育導入期におけるソルフェージュのあり方—オルフの教育理念を生かして—」『武蔵野音楽大学研究紀要』第22号：161-173。
- ・作野理恵 2005「ドイツの幼児・初等教育で使用される音楽教材の分析と考察」『大阪芸術大学短期大学部紀要』第29号：201-220。

楽譜・書籍

- ・Dandelot, Georges 1956. *Etude du rythme*, Paris: Alphonse Ledec Editeurs—propriétaire. [ジオルジュ、ダンドロー 1956『リズム練習』安川加寿子(訳)東京：教育出版株式会社]。
- ・藤井伊都子、鹿島田章子、原田由利子共著 2015(第31刷)『リズム——初歩から応用まで』東京：音楽之友社。
- ・呉暁 2008(新版第38刷)『5才のリズムとソルフェージュ』東京：音楽之友社。
—— 2009(第49刷)『4才のリズムとソルフェージュ』東京：音楽之友社。
—— 2009(第34刷)『リズムとソルフェージュ① 6～8歳向け』東京：音楽之友社。
- ・宮崎幸次 2013『新装版 カール・オルフの音楽教育——楽しみはアンサンブルから』東京：スタイルノート。

**Rhythm Teaching in Introducing Solfège to Preschool and Early Elementary School-age Children:
A Strategy Focused on Eighth Note Values**

Eri SHIMADA

This paper discusses a method for teaching solfège to children of preschool and early elementary school age, focusing on rhythm learning in order to provide a foundation for music reading skills.

An introduction to solfège is indispensable to music students, best received as early as possible in their education. Due to its complexity, however, we often see cases in which students are beset by confusion too long before being able to advance. This study proposes an effective way of teaching solfège that enables young children to grasp it more quickly and easily, and that fosters their ability to deal with more advanced and complex subject matter in subsequent years.

It is critical that young students beginning rhythm learning appreciate the relationship between notes and their values in conjunction with the idea of meter and beats. Rhythm learning is generally initiated using metric patterns whose reference unit is the quarter note. When the eighth note is subsequently introduced into rhythm patterns, some students are so confused by their arrival that the progress of their rhythm learning is interrupted. There is the serious possibility that such confusion may not only prevent them from playing entry-level rhythm patterns but also hinder them from smoothly advancing to later stages of music education. This study contends that young students' confusion stems from the fact that because the value of an eighth note is half that of a quarter note, at least one note in a given rhythm pattern will not fall on a numbered beat in a meter whose basic unit is the quarter note.

Therefore, the author proposes a teaching method employing an exercise using a rhythm pattern which enables the beginning students to fully comprehend the value of an eighth note, as well as allowing the instructor to verify the effectiveness of the practice. This rhythm pattern is characterized by a simple structure in which a single eighth note is placed between two quarter notes. Adoption of this three-note pattern permits the eighth note—the value of which functions as the basic metric unit in the rhythm pattern—to fall on a numbered beat.

Using this rhythm pattern has three advantages: first, it makes it easier for beginning students to clearly recognize the value of a quarter note, because one quarter note is placed just before the eighth note and the eighth note does not thereby hinder the students from grasping the value of the quarter note. Second, it enables beginning students to precisely apprehend the value of the eighth note, because it appears alone, preceded and followed by quarter notes. Third, it assists in familiarizing students with the relationship between the eighth note and its value by allowing the eighth note to sound on a numbered beat.

In conclusion, this teaching method, through the three effects of the suggested rhythm pattern, should

facilitate beginning-level students' accurate understanding of the appropriate relationship between notes and their values, in connection with meter and beats.

幼児及び小学校低学年の児童のためのソルフェージュ指導法の研究

—8分音符の音価に着目して—

嶋田英里

本研究では、幼児及び小学校低学年の児童（以下「幼少期学習者」という）のソルフェージュ学習を円滑に進めることの助けとなるリズム学習を骨子とした指導法について考察する。

ソルフェージュ学習は早期に開始することが望ましいが、幼少期学習者が課題の趣旨や関連するルールが咀嚼できず、学習の進捗が長期間停滞してしまうケースが見られる。その状況を円滑に克服させ、その後の高度で複雑な学習内容に対応する能力を育む助けとなる有効な指導法を考察することが、本研究の主たる目的である。

リズム学習において、幼少期学習者に音符とその音価に関する相対的な関係を拍節及び拍と結び付けて理解させることは大変重要である。リズム学習は4分音符を単位音符とする拍子から開始するのが一般的である。その後の学習過程で8分音符をリズムパターンに導入した途端、リズム学習の進捗が停滞する傾向が見られる。このような状況は、単に幼少期学習者のリズム表現が不正確になることに留まらず、その後の音楽学習を円滑に進めることの妨げとなり得る。

このような状況が生じる理由について、本研究では次のような仮説を立てた。すなわち、4分音符を単位音符とする拍子においては、8分音符の音価が4分音符の音価の2分の1であることに起因して、リズムパターン中の少なくとも1つの音符が整数番目の拍で打たれない事象が発生する。この事象により、幼少期学習者による音符の音価に関する理解が曖昧になるのではないか。

この仮説に基づき、本研究では、8分音符の音価を正確に認識できるよう促すリズムパターンをリズム学習に組み込んで実践させ、その効果確認を行うことを骨子とする幼少期学習者の指導法を考案した。本指導法は、指導に用いるリズムパターンが、1個の8分音符の前後に4分音符を置くという簡素な構造を備えることを特徴とする。その結果、このリズムパターンでは1個の8分音符が単位音符として拍の整数番目に打たれる。

このリズムパターンは、以下の3つの効果を有すると考えられる。第一の効果は、8分音符の直前に4分音符を置くことで8分音符が4分音符の音価の理解を妨げないようにし、4分音符の音価の確認を容易にすること。第二の効果は、8分音符を単独で配置し、直後に再び4分音符を置くことで、8分音符の音価の正確な認識を促すこと。第三の効果は、8分音符が整数番目の拍で打たれる構造によって、8分音符とその音価の相対的な関係を馴染み易くすること。

本指導法は、本リズムパターンのこれらの効果を通じて、幼少期学習者が音符とその音価に関する相対的な関係を拍節と結び付けて正確に理解する助けになるものと期待される。

